

名古屋にプレーパークを立ち上げて

竹村万知子さん

(特定非営利活動法人 てんぱくプレーパークの会
元代表)



<プロフィール>

竹村万知子さん

1947年東京生まれ。早稲田大学卒業後、東京都職員として保健所、福祉事務所に勤務。結婚して名古屋で子育ての中、チュールップ幼児教室、天白公園を考える会、天白おやこ劇場と出会い、こどもが育つことの面白さに目覚める。1997年、夫と死別し、子どもたちの手が離れたのと、期を同じくして天白公園の工事が進み始めたため、思い切って、1年でもいいからプレーパークをやってみようと、名古屋市との公園関係の方に相談した。場所について理解を得られたので、人件費のめどはつかないまま、当時羽根木プレーパークで1年間ボランティアをしていた青年に来てもらえることになり、1998年に、てんぱくプレーパーク開園にこぎつけた。2012年まで、てんぱくプレーパークの会の代表を務める。



<参考>てんぱくプレーパーク HP
<https://tenpaku-playpark.net/>

インタビュー日時：2024年11月27日
聞き手：松村智史（人間文化研究科/都市政策研究センター）

松村 では、竹村さん、どうぞよろしくお願ひします。

竹村 よろしくお願ひします。

松村 まず、最初の質問というか、プロフィール的なところをお伺ひしたくてですね。差し支えない、言える範囲で結構ですので、竹村さんの生まれですとか、出身ですとか、もしくはプレーパークに出会うまでの歩み的なもので、お願ひします。

竹村 分かりました。私、生まれは東京で、世田谷区の羽根木という所で。羽根木プレーパークが今ある所は、私が子どもの頃は根津山とって、根津さんという人の持ち山でした。私はあんまり外遊びする子じゃなかったけど、でも、学校の宿題だとかなんかで虫を捕らなきゃいけないとかっていうと、そこに行ったりしました。大学出てからは、また世田谷で、福祉事務所と保健所と。保健所のほうが先で、4年間で、福祉事務所は本当に半年ぐらいなんですけれども、保健とか福祉とかには関心がありました。

それで、結婚することになって、突然。夫がそれまでは東京のほうで仕事してたのが、日福大に移ったので、それで私も付いて、天白のほうに住むことになりました。その頃は割合、天白も、ちょうど子どもが増えていくときで、家が次々と建って子どもが増えてくという。今ちょうど、その逆になってきてるんですけれども。それで、いろいろな活動をしてる方が多くて。私自身は天白生涯学習センターの講座とかで、子育てや公園

づくりなんかの講座を、奥田睦子さんたちが、企画してみえたのに参加しました。当時の社会教育主事も優秀で、いつ見てもロビーで住民の方と打ち合わせをしていました。それと、住宅の中で未就園の子どもたちと一緒に遊ばせたい。結局、狭い団地の部屋の中で子どもと一対一でいると、みんな煮詰まるというところから、ぜひ欲しいっていう声があった。砂場なんかでも、みんな遊んだりはしてたんですけども、やっぱり天気の良い日もあるしっていうことで、集会室を借りて始めたら、そのまた先生に来ていただいた方が、すごいすてきな人というか。

松村 その先生というのは、保育士さんとかってことですか。

竹村 はい。元は幼稚園の先生だったんだか、保育園の先生だったかで、経験のたっぷりある人で、金城の幼児教育を出られて。だから、非常に自然の中で遊ぶこととか子どものやりたいと思うことを大事にするっていうところでは、もう本当に目からうろこっていう感じで。多分、こどもNPOさんの人たちも同じ先生で、向こうはさらに、幼稚園なんか行かないでこのまま続けたいって、3歳児、4歳児、5歳児と続けたから、もっと学んだと思うんですけど。私たちはみんな、それぞれ幼稚園に行ったり保育園に行ったりして。でも、2年間とか、子ども2人いると4年間ぐらい、4年間か5年間か、ずっと子どもが育つところを目の前で見せてもらって、すごいカルチャーショック

とすべきか、すごいことだなって思ったもんですから。



松村 それは今お話伺ってた将来のプレーパークの、自由な子どものやりたいことを尊重することとも、ちょっと先の質問になっちゃうかもですけど、関係してそうなのかな。

竹村 つながってきます。要するに、子どもが育つかっていうか、子どもがやりたいと思うことを第一にするっていうか。それと、自然の中でたっぷり遊ぶって。本当は9時から12時までの保育時間だったんだけど、子どもたちがどこどこに行こうとか言うと、そのまま一緒に行っちゃって。それこそ真冬の、1月の25日かなんかの小雪がちらつくような日に、「東山動物園に行きたい」って子どもが言ったっていうんで、一緒に付いてって、みんな。すごいもんだなと思ってね。

でも、そのとき見てたら、やっぱり3歳、4歳の子、3歳児だからもうその頃4歳になってるんですけど、その辺の子たちは半袖で全然平気だし。逆に1歳ぐらいの、うちの子はちょうど下の子が2歳

前ぐらいで、一緒に連れて歩いてたんだ。母子のグループをつくって。それこそ、寒いと、もう、わあわあ泣いててね。地下鉄の階段、最後、帰るとき、下りて、風が来なくなったら、ぱっと泣きやんでね。すごいなと思って。これだけ子どもって、1歳、2歳って、みんな同じように思って、2、3歳の違いなんてそんなに思ってなかったけど、生活の仕方によってこれだけ違うんだなと思ってね。

松村 竹村さん自身も今お話くださった先生たちの取り組みとかに共感するところがあって、そういうところを探していたら、たまたまそういう先生に出会ったって感じですか。

竹村 多分、私が選んだわけじゃないんだけど、もうちょっと上の世代の人で選んでくれた人がいて。いい先生がいるっていうんで呼んでくれたんだと思いますけれども。本当に、大人だったら「順番、順番」って言って止めるようなところを。それこそ、集会室の折り畳みのテーブルかなんかを立てて滑り台にしたような所に、子どもたちが、わっと寄ってきて、並んでる子もいれば横入りする子もいるんだけど。親が慌てて止めようとしたら、「並んでる子、何にも言っていないよ」って言われて。「だから、親がそんなに先回りするんじゃない」って言われてね。

松村 本当にそこでは子どもが主役というか、子どもがやりたいことだとか、子どもの自由な気持ちとかを尊重しようっ

ていう、そういう保育方針があるんですか。

竹村 そうです。それはもう徹底してました。その代わり、割と、やるべきことはきちんとね。毎日やってると、子どもたちは大きい子を見て、自然にまねしてっていう感じで。つるしている洗濯挟みに、ハンカチやタオルを掛けるとか、お弁当を出したりとかっていうのを、いちいち言われなくても割と流れに沿って、どんどん子どもたち、できていくようになるんで、すごいもんだなと思ってね。大人がいると何でも口で言って聞かせようと思うから、すごいうっとうしくなるんだけど、子どもたちはちゃんと、ちょっと大きい子がいると、すごく何でもまねしてね。だから、最初3歳の子を入れてたお母さんたちが、下の子を置いてくわけにもいかないから付いて送ってくると、そういうのをどんどん子どもがまねしてるのを見て、「こういうのいいね」って言って。「親も付いてくから一緒に連れてってください」って言って、ついていったんですけれどね。「どこまでついてくるかは、自分たちで判断してね」って言われましたが。

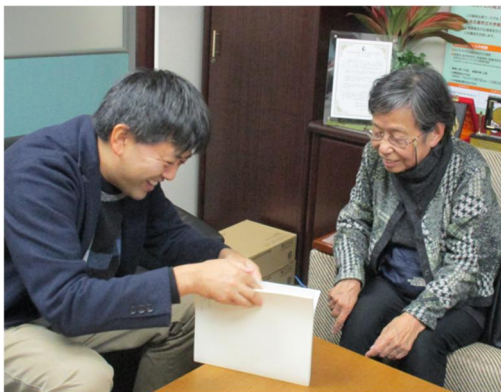
松村 それは竹村さんのお子さんが保育園の年齢に。

竹村 上がる前ですね。だから、3歳のときまでですね。3歳じゃなくて、4歳になるまでですね。4月に4歳になったところまで行ってたんですが、その後はうちは保育園に入って。めばえ保育園って、これもいい保育園だったんですけれども。

でも、その時期は私も子どもがだんだん手が離れたなっていう感じで、それから先のことをいろいろ考えて。

その頃に奥田さんやなんかと、生涯学習センターの講座やなんかで知り合っ
て。奥田さんの住んでみえた場所が公園になるというので、奥田さんが、公園になるんだったら、せっかくのいい環境を子どもたちの遊び場として残したいということで。その運動が『おーい天白公園』なんです。その冊子なんですけれども。

松村 こちらが最初のところなんですかね。



竹村 そうですね。まだ、要するに、公園になってない。ただ、ちょうど1982年に名古屋市が公園の計画を最初に出したんですけれども、その後バブルに入ったのかな、土地の買収が進まなくて、長いこと、10年ぐらい、公園予定地としてそのまま放ってあったんです。こんな状態だったんですけれども、どういう公園にしたいかっていうのは何回もワークショップをしたり、地図を描いたり、いろいろなことをやって。そこで集まった人たちの中に、白石公二さんっていう。これ

は造形教育やなんかをしてみえて、雑木林研究会にも入って、あと、金城幼稚園の園庭の整備だとか、いろんなことを手掛けた人で。子どもと自然というところが共通の、そういう公園にしたいねっていうことで。その3人がずっと、天白公園を考える会から、天白公園をつくる会にしようとかいってやってきたんですけれども。

松村 確認なんですけれども、この公園自体は市のものですよ。

竹村 そうです。

松村 この場所を公園にするに当たって、市民側というか、そういう人たちが自分たちの考えを、団体としてまとめたのですね。

竹村 提言もしました。それこそ、IPAっていう子どもの遊ぶ権利のための国際的な団体NGOやなんかの人にも、日本で集会か総会かなんかやったときに一緒に来てもらって、見てもらって。この公園をどうしたらいいかという、この土地をどんな公園にしたらいいかという。

松村 竹村さんがこの市民団体っていうんですか、団体に加入されたのは、いつ頃ですか。

松村 ちょうど1984年ぐらいから。

竹村 ただ、この頃はまだ下の子が2歳になるかならないかぐらいだったので、夜の会議には出られないしっていう感じ

で、出られる範囲で参加していたっていう感じで。

松村 竹村さんの、この考える会に入った思いや、こういう働き掛けをしようっていう動機とか経緯というのはどこにあるんですか。

竹村 一つは、私自身はすごい子どもの頃はインドア派で、本ばかり読んでる子だったんですけれども。中学、高校のときに少し山岳部やなんか、それもあんまり体力もなくて付いていけないことも多かったんですけども、そこで自然とか考えたのと。あと、大学生のときに、早稲田だったんですけれども、岩手県の小繋という所で、入会権の問題で裁判闘争なんかしてるのを法社会学の先生やなんか支援してて。卒業生がそっちに住んだりしてやっていたので、夏休みに時々、1週間、夏休みとゴールデンウィークかな、私も行ったのは2、3回なんですけれども、そういうところで。つくづく私も体力がないのと、何も知らないのと、自然とか何も知らないことに気が付いたけど。でも、すごく刺激になったっていうか。そういうものが、人間にとってすごく大切なものなのに、都市の生活では切り離されてしまっている。

松村 市のほうにそういう提言だとかをするということは、当初もし行政だけでやっていたら、子どもたちのための、そういう緑がある場所が、つくられていなかったかもしれないね。

竹村 そうですね。今の原っぱになってる辺に野球場ができて、その向こうにテニスコートができてっていうふうな、スポーツ公園のイメージだったんですね、82年に出されたのが。それを普通だとなかなか市民までよく知らないんだけど、奥田さんは地権者だったので、そういう説明を聞いて、これではいけないと思って。

松村 野球場とか、ある種、人工的ともいえるものではなくて、そのままの緑とかを生かしたプレーパークとかをつくりたかったっていうことなんですか。

竹村 奥田さん自身はその場所で子どもを育ててたもんですから。

松村 天白区で？

竹村 天白区どころか、今の公園の中です。プレーパークの一段上がった所、そこで育てて。それで、子どもたちが「お母さん、来て。今、葉っぱに露がたまって、すごくきれいだよ」って言って、呼ばれたりしてね。そういう子どもたちの感性みたいなのにすごく感動して、そういうのを残したいなというふうに思ったとおっしゃっていました。

松村 天白区自体は、元来、天白村というのがあったようですね。1955年に名古屋市に編入されてからは、名古屋市のベッドタウンとして、急激に人口が増えて再開発が進んだようです。その中で、緑を守って行こうという動きですか。

竹村 それこそ、私たちのとこの幼児教室がよく遊びに行ってたのは、平針。今、ここも農業センターなんで、農業センターの所は残ってるんですけども、その裏手あたりに、いつも崖滑りしてた所がありました。相生山の辺にもあって、八事裏山のほうにもあってっていう感じでね。そういう所にみんなで遊びに、よく行ったりしたもんで。これは公園になった所は残るけど、その周りはまだ全部なくなるなっていうのは感じたので、公園の中だけでもそういう所を残したいし、残せるなどは思ったんですよ。羽根木公園もよく知ってたから。羽根木プレーパークができて、元の、うっそうとした林の感じはなくなったんだけど、でも、その木にいろんなロープを掛けたりなんかして遊んだりする公園になった。

松村 私はまだ2年前に名古屋に来たばかりで、あんまり理解できていなくて恐縮なんですけど、羽根木パークというのは天白プレーパークとは全く別なんです。

竹村 そうです。別っていうか、モデルにしたんですけどね。この頃はまだ世田谷の羽根木ぐらいしかプレーパークっていうところはなくて。まあ、プレーパークができたのは私がこっちに来てから後だったんで、知らなかったんですけど。いとこやなんかが行ってるよっていう話だったんで、資料を送ってもらったりはしたんですけども。

松村 じゃあ、世田谷に昔、お住まいで、学生時代も早稲田で東京とかにいるときから、もう。

竹村 羽根木のプレーパークができたのは1972~1973年頃だと思うんで。

松村 ただ、存在は知っていて、ここをモデルにしたということですか。

竹村 そうですね。もうこの頃から羽根木には視察がものすごく全国から来てました。

松村 そんな有名な場所だったんですね。

竹村 16ミリの映画やなんかも撮った人がいたりしてね。知られてはいたんですが、知ってる人には。

松村 そこを一つモデルにしてやっていこうっていうのは、奥田さんや竹村さんたちの、グループの共通の思いとしてあったわけですか。

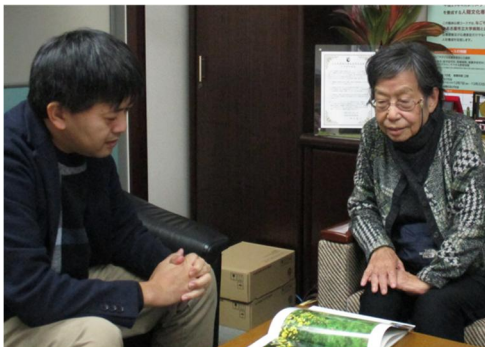
竹村 そういう感じですね。共通のイメージとしては、そういう感じ。それが、いつ来て、いつ帰ってもいいっていうこと、常設でということ。あと、子どもがやってみたいことを自分の手で実現できるっていうことと。そういうことを大事にしたいっていうことなんですよね。本当に子どもの日常の遊び場として、いつでも誰でも、子どもだけで来られるっていう場所。もちろんちょっと離れてる人は子どもだけでは来れないし、乳幼児っ

ていうか、あんまりちっちゃい子は一人では来られないから、お母さんと一緒になるんだけど。テーマパークが「ハレ」の遊びとすれば、プレーパークは「ケ」の遊び場なんです。

松村 時代的には、この80年代って、まさに再開発だとかってことがどんどん進む一方で、お母さんたちだとか、市民活動とか、ちょっとそれに反対の声も全国各地で上がっていた時代ですよ。

竹村 そうですね。実際に遊んでいた所が、開発されて、なくなったとかね。でも、そうは言っても、他人の私有地は何ともならないけれども、せめて公園とかにでも造りたいねって。ただ、まだこの時期は本当に視察にはいっぱい来るけども、実際、次が動かないでいたんだけど。その後、川崎だとか富士とか仙台とか、それぞれに、種はまかれていったっていう感じですね。

松村 全国各地でプレーパーク的なものを造ろうとか、緑を大切にとか、子どもが本当にしたいことをさせようという声が強まったその当時に、各団体間でのネットワークとか協働っていうのはあったんですか。



竹村 最初の頃は、IPA っていう国際組織の日本支部の中に「冒険遊び場情報室」というのができて、その IPA の最初の日本支部長が、羽根木を始められた大村璋子さんという方で。2代目の支部長が奥田さんだったんですけどね。でも、もう今は「NPO 全国冒険遊び場協会」として、ずっと続いています。

松村 IPA っていうのが国際レベルでの、プレーパークとか緑の中での子育てとかを提言してるネットワーク。

竹村 ていうか、最初は、IPA は国際プレーグラウンド協会だったのかな。それで、プレーパークの最初は、デンマークのエンドラップの冒険遊び場っていう、戦後すぐの頃、廃材遊び場で、子どもたちがいきいき遊ぶのを見た、イギリスのアレン夫人が紹介し、その後子どもの権利条約の制定もあって、「遊ぶ権利のための協会」と改名しました。

松村 わかりました。

竹村 ヨーロッパの冒険遊びを見て、大村夫妻が、IPA の日本支部というのを立ち上げられたと理解しています。

松村 IPA については、後でネットとかでも調べてみますけれども。じゃあ、その精神を体現したというか、そこに共鳴する形で。

竹村 日本で非常に発達したみたいですけどね。日本の子どもたちや、子育ての問題点に応えるものだったのかな。

松村 日本の中でも、こういう全国各地でプレーパークとかを推進されていらっしゃる方で、ネットワークづくりとか、横のつながりだとか、意見交換をしているケースは。

竹村 30年ぐらい前かな、今から。多分、全国集会を開いて、急速に広がったんだけど。ただ、常設っていうのか、週4回以上開くというのはなかなか難しく。行政からの何らかの支援がないと。羽根木では、運営は住民、土地と人件費は行政という風にできたときからしていましたが、うちは見切り発車で突っ走ったもので、交渉力不足で。

松村 補助金とかそういうことですか。

竹村 そういうことですね。プレーワーカーの人件費です。だから、そういうシステムができないと続かない所が多いのかな。

松村 すぐにNPO法人としてスタートしたんですか。

竹村 いえ、98年にプレーパークができたんですけども、その前は天白公園を考える会とか天白公園をつくる会という形で、学習したり提言したり。

松村 NPOができる前ですね。

竹村 そうです。NPOはこの段階ではまだできてなくて、98年では。2019年になって、やっと法人格を取得したんです。

松村 任意団体で、法人格はなかったってことで。

竹村 そうなんです。事務仕事が増えるから、とて。ちょっとやめとこうということで。1998年はちょうどNPOが次々できてた年なんですけどね。何しろ「とりあえず1年やってみよう」と始めたので。

松村 てんばくプレーパークさんは、任意団体として、98年にできて。そのとき竹村さんはどういったお立場で。

竹村 そのとき私が代表で、とにかくもう言い出しっぺだからって感じで。できるだけ現場にいようと思って。何が起きるのか、何も起こらないのか、自分の目で見たいと思って。

松村 それで、奥田さんとか、白石さんとか。あと、全国とかと連携しながらってことで。

竹村 全国はまだ、その頃はIPAを中心になんていう感じだった時代なんで。でも、最初の冒険遊び場全国集会、開かれたのが2000年頃だったかもしれないですね。

松村 このインタビューの趣旨である、その当時の思いとか葛藤とかっていうお

話で言うと、公園の中でそういう場所をつくりたいっていうのが、まず、思い。

竹村 それも常設でっていう。要するに、多いのは週1回とか、月1回とかだったら誰でも始められるんですが、それだと、それで始めた人の子どもが大きくなったら、自然と関心も少しずつ移ってくし、それがうまく引き継がれることが難しいんですよ。だけれども、とにかく常設でプレーワーカーがいていたら、何かしらっていうか、そこで人が育っていかないとしょうがないかなというので、それで無理して始めたんですけれど。

松村 基本的なところで恐縮ですが、プレーワーカーって、どんなことをするんですか。

竹村 一番のプレーワーカーの仕事は、毎日っていても、われわれ、せいぜい週4日しかできないんですけれども、月に20日ぐらいがせいぜいですが、とにかく、その場にいつでもいる人なんです。子どもたちが来て、本当に命に関わるような危険があるときは対応するし、子どもがけがしたりすれば、親に連絡したり、救急車を呼んだり、病院に連れてったり、そういうことはするんですけれど。それと、あと、子どもが遊びたいとなるような雰囲気をつくるっていうことが仕事なんですね。

本当は若い子で、わあっと、まだ本人も子どもの気分が抜けないような未熟さもあって、熱量もあってっていう子がいいと最初は思ったんですけれども。それ

は確かなんで。誰か大人が常に出られる状態でありさえすれば、それでもやっていけるんじゃないかという、プレーワーカーを1人で、取りあえず1年間やってみようかっていうことで始めちゃったんですけれどもね。でも、本当はプレーワーカーが2人以上いないと、つまり、大人が常に出てるっていうのはかなり大変なので。

私は、2、3年はずっといようかなとは思っていたんだけど、開園するときにはね。だけど、それでも、私でも、病気の時もあれば、気が乗らないときもあるかもしれない。あるいは、どっかに遊びに行きたかったりするかもしれない。そういうときに出てくれるっていうか、そういう大人は何人が確保しないと始められないなということで、世話人さんという形で。それでも、本当は土日、空けたいんだけど、土日を全部空けるのは、子どものいるお母さんにとってはちょっとつらいので。家族でどっか出掛けたいときだってあるし。それで、あんまり無理のないようにというので、平日4日間の開催に、土日は月1回ぐらいとかいうふうな。それも結構いろんな状態で変わってはいったりするんですけど。柔軟といえば柔軟、いいかげんといえいいかげんな感じでやってたんです。

最初の頃はプレーリーダーって言ってたんです。羽根木でもプレーリーダーだったんです。でも、だんだんとみんなが、リーダーって言うとレクリエーションリーダーみたいなイメージを思い浮かべちゃうし、どうなのかなっていうので、だんだんとプレーワーカーを使う所

が増えたんですけど。うちは別にプレーリーダーでもいいんじゃないという感じで、そのままプレーリーダーって言うってたんだけど。あるときに、その時のプレーリーダーの人が、他の人たちはみんな、子どもからはニックネームでっていうか、それも子どもが付ける場合もあるし、本人が「こう呼んで」って言う場合もあるんだけど。その人の場合は年齢もちょっと上だったし、プレーリーダーと呼んでほしかったのか。自分の呼んでほしい名前っていうのを言わないで、勝手に名前付けられたら、それも気に入らなかったみたいで。どうもお母さんたちにリーダーと呼ばせてみたいなんです、それはちょっとまずいかもしれないなっていう感じになって、うちもプレーワーカーにしたんですけどね、そのときから。

松村 最初の質問として、竹村さんのこれまでの歩みですとか、まず、これが立ち上がるまでの思っという質問は取りあえずできましたけど。一回、休憩します？ どうですか。

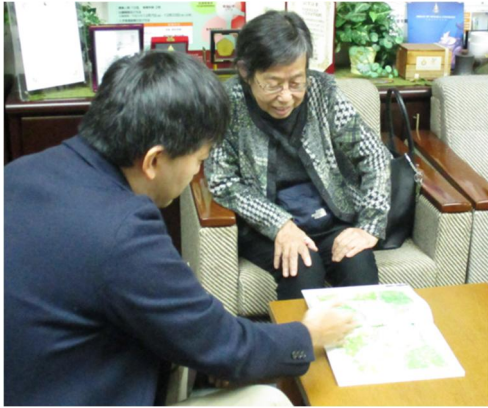
竹村 そうですね。どっちでもいいんですけど。

松村 じゃあ、もう一間、大丈夫ですかね。このまま続けさせてもらいますけれども。実際にスタートしたプレーパークですけれども、素朴な疑問として、子どもたちって普段、学校があるわけじゃないですか。週4日とかっていうのは、放課後なのか。つまり、質問の趣旨としては、プレーパークという場所がどうい

場所なのかっていうことを。私の不勉強もあって、はっきりとしたイメージが、まだ浮かばなくて。その意味合いとかも、時代によって変わってきているのであれば、それも踏まえて、ちょっとお話しただいてもよろしいですか。

竹村 一つには、始めてみたら、プレーパークっていうのは小学生の遊び場というふうに関わりから受け止められて。しかも、まだ今みたいに公園として整備される前だったから、山の中に怪しい人がぼつんといる。小屋は建ててもらったんだけど、なかなか来なくて。それでも、小学生が2、3人で来て、気に入ったらクラスの子をみんな連れてきたりとか、そういうのはたまにあったりするんですけど。それこそ雨が降ると、3日ぐらい誰も来ないねっていう日もあったりしてね。3日目ぐらいで、こっちももう、「これできょうも来なかったら、明日また雨だったら休もうか」って言ってたら、その日になって常連の子が数人来てね。やっぱり子どものほうも雨が続いて飽きちゃってたみたいで、なるほどと思ってね。

松村 その場に来たら、鬼ごっことかなんかする感じですか。すみません、全然イメージがなくて。



竹村 鬼ごっこは自然に始まったのかな。プレーワーカーによっても、学生時代、小学生と一緒に遊ぶサークルに入っていて、小学校の先生になりたいという希望で、でも、試験に落ちちゃったから、1年間やるっていうんで来たんだけど、結局3年間やってたんだけど。その人なんかは子どもも誘いやすいのか、「鬼ご、しよう」って言ってね。それが遊具の上を走ったり、「山おにご」といって山の中を走りまわってすり傷だらけになったり。われわれから見るとすごいと思うような遊び方してたけれども、鬼ごっこもするし。

それから、最初のときのプレーリーダーなんかは工作をしたりするのが好きだったから、自分で、他の人が、子どもたちが何をしよう、太鼓かなんかを作るんだって言って。大きな丸太の太いのが残ってたんで、切った輪切りにしたのがあったのを、これを太鼓にするって言って、上で炭を燃して、時間が長くなって作ったね。もうちょっと細かい木工みたいなのをやったりして、マイペースで割と遊んで。子どもたちは子どもたちで、それはそれで時々ちょっかいをかけたりしながら、子どもたち同士で遊んだり。いろんな道具があったりするか

ら、火もたけるしっていうこともあって、土も掘れるしっていうことで。

ただ、最初は子どもはみんな、そんなことやっていいかどうか分かんないから遠慮してるけど、だんだん、みんなやっていると、どんどん遊びは広がって。だから、最初の1年間はかなりプレーワーカーの人もつらかったと思いますけどね。子どもが、わあーと遊んでる状態じゃないから。

松村 その場には遊具とか、この写真にあるような火をおこす何かだとか、いろいろあるんですか。

竹村 炉は作ってあって。コンクリートブロックやレンガを積むだけなんですけどね。だんだん、そうしたら、下がどんどん土が焼けてきちゃうから、レンガを下にも敷こうとかね。そういうのもだんだんとできて。それから、ノコギリだとか、くぎだとかがあって。金槌とかね。そういうのを使って遊び始める子も出てくるし。あと、シャベル、スコップもあったりするから、穴を掘ったりとか、だんだんとは広がってきたんですけど。最初の1、2年は、最初の1年目は特に、みんな何をしたらいいんだか分からないというところはあったんですけどね。

あと、要するに、日中、子ども、学校に行ってるわけですけど、就園前の子どもは暇なわけなんで。それで、最初は「森のひろば」にしたんだっけ、「森は友だち」っていう名前にしたのかな。それは生涯学習センターかなんかを通じて、最初は募集をかけたんだけど、その後はロコミやプレーパークの張り紙

で募集をして。要は、集まって、おやつを作って食べるというのがメインで、あとは勝手に遊んでってという感じで。それこそ、小さい子だと何してでも遊べるし。感想のアンケートで印象的だったのは、“「おやつ」（昼ごはんになる）が楽しみ”、“自然の中で食べたり遊んだりするのが新鮮”と並んで、「ここでは子どもにダメって言わないなくていい」が上位だったこと。

松村 ここで、プレーワーカーはコミュニティーワーカーでもある、人と人をつなぐって言う、この辺を教えていただけますか。

竹村 教えていただけるっていうほどのあれじゃないけど、やっていてすごく思うのは、こうやって遊び場をつくってお母さんたちが集まると、だんだんとコミュニティーができてくるんですよ。ね、その中で。それもあつし、近所の公園を散歩してるおじいさんや、イヌを連れて散歩してるおじいさんが、集まってというほどじゃなく、1人ずつやってきて、おしゃべりして、お茶飲んで行ったりすることもあつて。小学生や中学生も来るし、いろんな世代の人が集まれる場所として。ここにも誰かが書いていたけれども、プレーパークの良さについて高校生だったかが書いてたのが、いろんな人に会える、非常にいろんな人がいるって言うことを言ってね。結局、それをつないでるのはプレーワーカー。いつもいる人なんですよ。

松村 プレーワーカーってというのは、本当に純粹に、目の前の子どもと遊んだりするだけではなくて、プレーパークっていう場にいらっしやつた、様々な方々をつないでいたり、その架け橋になったりするような、そういう役割も担っているってことですか。

竹村 そういうことです。公園っていうのは実はいろんな人がいて。本当に困っちゃう人もいるんですけどね。うちなんかでも、小屋を3回、荒らされて、最後は火をつけられたんでね。でも、困ってる人やいろんな人を、退屈してる人も含めて。中には怒鳴っていく人もいるし。

松村 第一義的には、自分のイメージでは子どもです。子どもが来るんだっていうイメージは、それはあると思うんですけど。

竹村 それはもう中心なんですけれども。

松村 それ以外の大人や高齢者とかもその場に来るんですか。そこら辺、非常に興味があるので。一体、そういう人たちがどういう経緯とか目的で、その場に集まって来るんですか。

竹村 それはすごくいろいろなんです。要するに、午前中やなんかで特に何もなくて暇な時間なんかには、プレーワーカーいれば、散歩してるおじいさんの中には話してくる人もいるし。だんだんこっちも名前も覚えて、イヌの名前も覚え

て、ゲンキのおじいさんとか。イヌの名前がゲンキで。中には、それで、ここをもうちょっと切ってやろうとか、手入れしてくれたりする人もいるし。掃除してくれたり、草刈ってくれたり、落ち葉掃いてくれたり、そういう人もいるし。中には、確かに、子どもが投げた泥団子かなんかの中に石が入ってて、眼鏡が傷ついたって言って苦情を言われたこともあるし。いろんなことがありますけどね。

松村 プレーパークっていうのは、子ども、親子連れしか入っちゃいけませんよっていう場所ではなくて、いろんな人たちが、そこでいろんな人たちを呼び込んだりだとか、その中で交流とかが生まれたりする場でもあるのですか。

竹村 そんなに積極的に呼び込むっていう感じとも違うかもしれないですけど。公園というのは、通り過ぎる人も含め、多くの人が利用するところなので。

松村 自然に。

竹村 来る者、拒まずだし。

松村 そこら辺は、竹村さんの最初のきっかけとしては、自分の子どもの経験だとか保育士さんの経験から、緑の中で育まれる子どもたちっていうのがまずあったと思うんですけど。そういう地域の中での交流の場とかっていうことも、徐々に意識されるようになった感じですか。

竹村 それは奥田さんなんかむしろ非常にいろんな勉強された方なんで、子ども

もを1人育てるには一つ村がいるっていうふうにおっしゃって。どっかのヨーロッパのほうの格言かなんかかもしれないですけど。私も出典はよく覚えてないけど。それはそうだなと思ってね。最初から羽根木も多分、羽根木はうちより20年ぐらい早く始めてるから、ずっと先に進んでたんで。それこそ近隣とのトラブルももちろんあるけれども、その中で非常に面白い出会いもあったりするみたいで。

松村 そういうところは面白いですね。子どもが一人ひとり育つ上で、いろんな大人との交流とかが必要だっていうか。

竹村 いろんな世代の人が。

松村 さっき言ったように、多分、天白区の辺りは、戦後の再開発で、人口が急激に増えた地域でもあると思うんですけど。

竹村 そうです、天白区は来年50周年になります。

松村 その中で、これは私の憶測ですけど、もしかすると、かつてはあったかもしれない地域のコミュニティーだとか、地域の中で、一人ひとりの子どもを、いろんな大人が支えたりとかしていたのが、ちょっとずつ崩壊というか、そういうのが衰退していく中で、こういう場が必要となってきたっていうところもあったりするんですか。

竹村 古い農村の絆はあったとは思いますが、お祭りやなんかがあった時、そういう所には、餅まきするって言ったら地域の人もみんな来るんだけど。準備するのは地元の人で大変そうですが。ただ、本当に新しく入ってきた人たちは、最初のうちは皆さん、お友達を求めて。それが文庫の活動になったり、自主保育や幼児教室みたいな形になったりしたんだと思うんですけど。

松村 竹村さん自身も結婚されてから名古屋になってことだったので、特に天白区は、どちらかという若い子育て世代が、外から入ってきてた人が多分いたと思うので。必ずしも名古屋に地縁、血縁とか、友だちとかがない方たちも、ここで出会って交流とかしてたってことですか。

竹村 そうですね。今でも新しく入ってこられる方は、よそから来た方も多いですからね。

松村 そうすると、プレーパークが、全国各地に数ある中でも、名古屋の天白区って、再開発でいろんな所から入ってくる人たちの中でこそ意味合いみたいなものもありそうな感じですかね。

竹村 でも、どこも多かれ少なかれ、そういうところはあるような気がします。横浜あたりでもそうだし、東京の世田谷でもね。まだ、あの頃は、家が建ったりしてた時代だとは思いますが。

松村 どんどん人口が流入して、どんどん新しい新築とかアパートとかに人が入っていく中での、新しい子どもたちとか地域住民の交流の場みたいな、そういう側面もあったってことですか。

竹村 そうだと思います、多分。実は最近、ブレイディみかこさんっていう人が書いた小説で、『リスペクト』っていうのがあるんですけど。あれで、お母さんたちが、あの場合は家を占拠する。家を追い出されてなんですけれども。集まっているいろいろやっていくうちに、いろんな人につながっていくっていう。そこが似たところがあって。私はあの本を読んで、プレーパークと近いものを感じるなって思ったんですけどね。もちろん、要求も違うし、展開も違うけれども、その中で、本当におじいさんたちで、いろんな技術を持っていて、いろんなことできるんだけど、生かされてなかったような人たちが生き生きとして働くところやなんかはすごく、いいところだなと思ってね。

松村 プレーパークでの文脈で言うと、地域の中で住んで、もう引退とかしたおじいさんとかで、例えば、物が作ったりするのが得意とかの人たちが、ちょっと。

竹村 そういう人は結構います。みんな、空いている時に言葉を交わしたのがきっかけで。

松村 その人にとっても、自分を発揮っていうかね。

竹村 そうですね。こま回しだとかね。おじいさんよりも、もうちょっと若い世代、20～30代の人の方が、こま回して練習したりすると、すごくうまくなって、みんなが、わあー、すごいっていう感じになってね。

松村 そうすると、本当に80年代、90年代、天白区の辺りが急速に発展していく中での、新しい地域のつながりとか交流の場になっていたんですね、プレーパークが。

竹村 そうだと思います。

松村 プレーパークが、子どもの居場所になるという感じもあるんでしょうか。

竹村 そうですね、やっぱり、家庭にも学校にも居場所がない子どもたちというのは、多いんですよ。その全ては来ないとは思いますが、外に出て、近くに天白公園がある子やなんかは遊びに来る子は結構多くて。実は最初の頃、羽根木やなんかでは、中学生やんかがすごい大勢で、くぎ刺しなんかして遊んでるのを見てね。そのときに中に一緒に入ってた子が、プレーワーカーになって来てくれたの。最初、初代のね。呼んで、来ていただいたんですけども。そのときはボランティアで、V365っていう、1年間ボランティアがその頃はまだあって。つぶれちゃったんですけどね。それで来てた子が、それが終わって予定がないっていうから、じゃあ、来てくださ

いって言って、お願いして来ていただいたんですけども。

そのときには、一緒に遊んでる中学生のこと、特には何とも思わなくて、ただ、中学生がこういうふうに遊んでるといいなあと思っただけなんですけどね。しばらくして、小学生で来てた子たちが、3、4年して中学生になったりして、相変わらず来てくれる子どもってのは、結構、障害があったり、家庭の事情があったり。障害も、重い障害だとかちょっと無理なんですけど、軽い障害の子が。全部じゃないですけど。「最初に思ってた中学生のイメージと違うわ」って言ったら、そのときのプレーワーカーが「それは間違ってるってだけです」って言われたけど。いろんな子がいるし。逆に、外に居場所があって、外でしなきゃいけないことがいっぱいある子は、なかなか遊びに来れなくなるけれども、そうじゃない子が遊びに来てくれるのかなというのは感じましたね。

松村 今の、外とおっしゃるのは、プレーパーク以外に。

竹村 以外の場所ですね。例えば、学校で成績が良くて受験をしなきゃいけないとか。そういう子とかは、なかなか来る暇がないですよ。

松村 そうすると、学校とか塾、習い事とか、部活とかに属していないような人たち。

竹村 のほうが来やすいみたいですね、中学生ぐらい。

松村　すると、そういった子どもたちの受け皿って言ったらちょっと変かもしれないですけど、受け皿っていうか、居場所になっていたところがある。

竹村　それはあると思います。

松村　そこは意図されてた？

竹村　最初は、そこまでは意図はしていなかったんですけど。ただ、最初の頃に来てた子たちでも、誰だったかな。夏休みの朝一番に来てて、「どうしたの」って言ったら、お母さんとけんかして飛び出てきたんで、きょう、ここが休みだったらどうしようかと思ってたっていう子がいてね。その子はあんまり深刻な問題のない子だったけど、そういう子でもやっぱりそういうことがあるし。まして、学校ではしょっちゅう、いじめられてるとかね。軽い障害があったら大抵、そうなるんですけども。



松村　そうすると、そういう子どもたちの、駆け込み寺的な、一時的であれ、身を置くとか、その中でプレーワーカーと

か違う大人が、自分を気に掛けてくれて、相談できるような場でもあるっていうことですね。

竹村　そういうことですね。ごく普通のお母さんたちでも、これまた向き不向きがあって、中学生たちとすぐ仲良くなれるお母さんもいるし。お料理のすごく上手なお母さんがいて、お母さんのほうもいろいろなんだけれども。そういう意味で、逆に、いろんな人が、いろんないいところがあるっていうことを、実感できるのがよい点だなと私自身が思いました。他の所だと単一の尺度で測られることが多いけど、いろんなことができる人がいて。

松村　そういう場所に、不登校なり、ちょっと学校に居場所がないとか、家庭の不和な子が、そういう子どもたちが来るじゃないですか。そういうときに、学校に行きなさいだとか。

竹村　それはないです。それは言わないというのは、よそを見学したりして、それは言わないことにしようとは話してました。

松村　悩み事とか困り事を向こうから相談してきたら、ちょっと聞く程度の感じですか。

竹村　そうですね。向こうから言ってきたら聞くけど、こっちからは詮索しない。

松村　一番いいかもしれないですね。

竹村 だって、そうじゃなきゃ、こっちだって困るし。本当に、障害があったりして就職するのも難しいような子やなんかは、子ども・若者相談センターに紹介したり。

松村 金山のですね。

竹村 そう。今、金山なのかな。前は栄のほうだったんだけどね。まだ栄の頃だったけど。それ以来、そこもずっとフォローしてくれてるけど。私も、その子だけは、長い付き合いだから、月1回ぐらい、今でもお茶飲んでるけど。

松村 そういう気になる子どもたちの情報とか、プレーパーク、もしくは竹村さんたちスタッフの中で共有というか、何かされているんですか。

竹村 プレーワーカーには一応、共有しますが。人によっていろいろ。だから、今どのくらい共有してるか分からないけれども、今は理事会で、昔は世話人会だったんだけど、それだと、そういう話をあんまりしないほうがいいかなっていう人もいるしね。考え過ぎちゃうっていうか、入れ込み過ぎちゃうかなとかいうこともあるし。

松村 難しいですね。学校的な指導をする場だと、多分、子どもも来づらだろうし、そこまで子どもも求めてないかもしれない。

竹村 そうです。むしろ、そういうことがないから来られるんだと思います。

松村 いい意味で、ほったらかす、過剰に介入とか指導されないってことですよ。

竹村 そういうことです。ただ、ちょっと心配かなと思う子は、みんな気が付いて見てる人が多いんだけどね。私なんかは気が付かないほうだからね。夏なのにいつも長袖着てるとかいうのを、気が付く人は気が付いて、リストカットしてるんじゃないかっていう。そういうのは私は全然、気が付かないから、ずっと後で聞いて、教えてもらったんだけどね。

松村 でも、ちょうど80年代、90年代っていう、日本の学校の中でも、例えば、校内暴力とか、いじめとか、虐待とか、そういうことがどんどん社会問題になった。その背景には核家族化とか、いろんな日本の社会構造の変化もあると思うんですけど、そういった子どもたちの受け皿になっていくような性格をプレーパークとしても強めていったのですか。

竹村 強めていったわけではないです。どんな子でも受け入れるという話で。不登校の子とかも。

松村 繰り返しになりますが、天白区は、名古屋のその当時の歴史的な変化の観点で言うと、新しい人たちがどんどん外から入ってきたエリアだと思うんですが。その中で、どちらかという、孤立してる家族だとか、ネグレクト的なママ

とかもいる。そういう人たちも、ここに来たりとか来なかったり。

竹村 そうです。それは、何人かは間違いないと思いますし、そうじゃなくて、特に何も言わない子は分からないけれども。

松村 お母さん、お父さんっていう、保護者とプレーパークの関係性ってどうなんですか。

竹村 乳幼児からお母さんが連れてきてるところは大体、お母さんも気に入って来るし、お父さんも誘って、土曜、日曜やなんかのときに来るっていうのがあります。ただ、要するに、ちっちゃい子、1人で帰れない子、けんかして嫌だと思っても、帰れない子を送っていくのは無理だから、それはおいてったらそのまま迎えに来るまでここにいるしかないけど。それはそれでかわいそうだからと言って、親には説明するんですけどね。自分で帰れるとこの子だったら、けんかして帰っちゃうっていう子は当然あるんだけど。池に落ちてずぶぬれになった近くの小さめの子を、送って行ったこともあります。

松村 親同士のコミュニティーって、できたりするんですかね。というのも、名古屋でも、特にこの地域は、外から移ってきた方たちが多いので。このプレーパークの中で、お母さん同士のコミュニティーができたりとか、悩み事を相談したりとかっていうのもあったりしたんですか。

竹村 乳幼児のグループ、今は森のひろばだったかな、森のひろばでは、そういうのは多いです。ただ、前は10回がひとまとまりで、お昼ご飯っていうか、おやつっていうか、作る当番のグループは最初のときに決めて、献立も自分たちで考えて作ってもらったりしてたんだけど。それで、10回ずっと同じ顔で顔合わせするんで、割と仲良くなる人もいるし。難しくなる人も絶対ないとは言えないですけど。

松村 プレーパークのほうで主催して、そのまま交流会みたいな形っていうよりは、そういう。

竹村 だから、乳幼児の、今は森のひろばか、森のひろばは一応、こちらがセッティングして。10回だけあれするけれども、その後、気に入った人が、ここの雰囲気が好きっていう人は世話人やなんかで残ることも。そうでなくても、幼稚園が終わった後、遊びに来るとか、そういう形でつながっていくので。ただ、コロナのときにやっぱり森のひろばが続けはなかなかできなくて、ばらばらにしたりしたもんだから、今どこまで続いているかよく分からないけれども。そうやって、逆にスタッフはみんな、森のひろばやなんかから、それから、幼稚園の後、遊びに来たり、子どものために来てた人たちが多いけど、中にはすごく気に入って、その後、世話人になったりして。

松村 森のひろばで、乳幼児は何をしてるんですか。

竹村 就園前の子どもたちだから、1、2、3歳児ぐらい。中にはもっとゼロ歳から来て、その辺のブルーシートの上で寝転がしてたりするんだけど。

松村 それはプレーパークとはまた別の団体が近くでやっている。

竹村 その分はプレーパークが主催して、募集して、それでやってるんですけども。

松村 竹村さんのところで、そういった学齢期というか、子どもたちに。

竹村 お知らせっていうか。それは別に、そんなに大したお知らせするわけじゃなくて、掲示板に貼ってたり、せいぜい幼稚園のお母さんの口コミだったりするんですけどね、弟や妹が。最初の頃は、近くの学校にお願いして、教室の後ろにチラシを置いてもらったりしたけど。最近では、インスタやHPぐらいかな。学校でのクチコミが一番大きいかな。

松村 分かりました。あと、今、虐待とか、発達障害とか、いじめとか、そういうケースが増えてきたっていうところで、関係機関と連携と人生の伴走者になるって、これ、どういうことですか。

竹村 それは、これがどこまでできるかは別なだけども、さっき言ったような、軽い障害やなんかがあって、就職やなんかもうまくいかなかったり、職場でストレスが多かったり、いろんなパニックを起こしやすいような子たちなんです

けど。私たちから連絡を取っている人も、そういう子が多いけれども。それは両方とも女の子だからね。男の子だとまた難しいんですよ。ちょっと違う難しさがあるのかな。でも、公式でなく、いろんなつながりはそれぞれあります。

松村 その関係機関は、子若センターのように、こっちからつないで相談する所ですか。

竹村 一緒に行って。親があんまりそういうことに熱心でないっていうか、障害があることをあんまり認めたくないっていうことがあるんだと思うんだけど。だけど、普通にではちょっと難しいかなというような場合は、長い付き合いができてるわけだから。だから、そういう付き合いのない人はなかなかできないんだけど。

松村 付き合いが長いと、やや踏み込んだ、ソーシャルワーク的なこともできなくはないってこと。

竹村 そうですね。あと、私たちですと仕事まで探すのは難しいので、子若と一緒に連れてって。子若も前のところはすごく人間関係を大事にして。ずっと向こうも伴走してくれるんだけど。私も月に1回ぐらい、向こう、彼女から電話があったり連絡があったりすると、一緒にお茶飲んで、おしゃべりしたりするんだけど。そうすると、時々パニックを起こしそうなきやなんかに、落ち着くかなっていう程度です。その程度です、できることなんて。

松村 いえ。そういう点で言うと、人生の伴走者としての。

竹村 そういうことなんですよ。

松村 本当に子ども期だけではなくて、その後の人生でつながっていくケースもあるってことなんですね。

竹村 そうですね。それは別にシステムとしてしっかりできてるわけではないけれども。

松村 それぐらいの長い付き合いとか、個人的信頼関係が深まっている場合には、そういうこともあるっていう。

竹村 そういうことですよ。

松村 例えば、虐待とかネグレクトとか、さっきの長袖であれば虐待を疑うとかリストカットっていうことは、スタッフさんたちも勉強とか研修をしている？

竹村 あんまりしてなくてね。だから、私自身気が付いてなかったぐらいでね。みんなに、気が付いてなかったの？って叱られたんだけれども。

松村 でも、本当に、より多様な子どもたちの場所にもなっていたってことなんですよ。

竹村 児相に相談したのは、羽根木でもそうだったみたいですけども、話を聞くと。夜、帰る時間になっても帰りが

らない。全然、いつまでたっても帰ろうとしないっていうような子が、時々あるんですよ。そんなに深刻でなければ、朝に喧嘩して鍵を持たずに家を飛び出して、まだお母さんが帰ってこないからっていうのは。あまり夜遅く、ここに1人でいるのも危ないからっていうんで、住宅まで送って行って、その子のお母さんが帰ってくるまで待ったりしたことはあるんですけどね。冬の寒い時期とか、ちょっと心配で。エレベーターも前に変なおジサンが乗ってきたので、怖かったとか聞くとね。

あと、児相に通報したのは、やっぱり、夜、帰らないで。前の晩はそこで野宿したとかって言うのでね。それで、その子のときは、取りあえず、一晩、家に泊めたんですけどね。

松村 お母さんが？

竹村 子どもが。小学校6年生の子。それはちょっとっていうんでね。

松村 児童労働に当たりますね。

竹村 そうなんです。でも、そのときは、一晩、家には泊めたけれども、それだと誘拐になっちゃうかもしれないって言われてね、助言受けたら。それで、取りあえず、その日はいったん帰したんだけど、今度、11月頃にまた同じことがあって。この季節に外で寝るのは無理だからって言って、児相のほうに。

松村 保護ってことですよ。

竹村 そのときのプレーワーカーが、弁護士さんに相談して、保護してもらったけど、でも、中3になったら帰されたみたいで。卒業間近になるとね。

松村 よくいわれる日本社会の変遷としては、家庭の機能がどんどん弱っていく中で、プレーパークであれ、違う所であれ、子どもたちもトー横キッズみたいなところになってるみたいになっていう。

竹村 行き場所のない子がいるんですよ。

松村 そういうことはちょっと感じますか、振り返ってみて。

竹村 それはあると思います。増えてるかどうかって聞かれると、それほど知らないわけだけれども、結構な数いますよ。いろんな意味で、親と子の関係がうまくいってないっていう。まあ、思春期は、そういうもの、とも言えますが。

松村 多分、プレーパークが、そういった子どもたちの受け皿として、本来スタートしたわけではないですよ。

竹村 ではないです。でも、子どもの居場所となるとは、そういうことも引き受けるということです。

松村 緑の中の自然とかっていうところですけども、結果として、そういう子どもたちのセーフティーネットとしての機能を、だんだん帯びてきているように認識しています。

竹村 それはありますね。要するに、子どもたちがだんだん大きくなってくると、いろんなことを聞くことが多いし。そして、うちの公園の中には、大変困ったおじさんたちがいて。若い子ども、女の子だったら小学校3年生ぐらいが狙われたりするんだけど。男の子だと小6～中学生くらい。自分たちのグループに引き込もうという感じでしょうか。

松村 変質者って意味でね。

竹村 変質者っていうか、要するに、その人自身も育つときに十分なケアがなかったっていうことかもしれないんだけどね。

松村 今、ケアって言葉が出てきたので、それにひもづけて言うと、このプレーパーク自体もケアの場ですかね。

竹村 広い意味ではそうですね。要するに、たまたま子どものそばにいた人だから、何か問題があるのであれば、そんなに過剰に勧誘はしないですけれども、言いたくないことを聞き出したりはしないけど、結構、聞いてると、ぽつぽつと、いろんなことを話す子はいるんでね。特に信頼されているプレーワーカーや大人には。

松村 一応、そういう子どもたちに耳を傾けたり、寄り添うっていう意味では、ケアのような機能もあるっていうところですかね。

竹村 実際にはあると思います。

松村 面白いですね。緑の中でのプレーパークっていうところから、かなり時代によって意味合いが変わってきて。

竹村 時代によってっていうか、そういうことも含めては。そういう子たちを特に選んでるわけでもないんでね。

松村 結果として、そういった子どもたちも入ってくるっていうことですかね。

竹村 それこそ、子どもたち、屋根に上った子が突然、ぱっと伏せたんで、「どうしたの」って言ったら、学校でいじめるやつが公園の中に入ってきた。

松村 逃げた。

竹村 隠れたみたい。だから、要するに、世間から離れてあるわけじゃないもんだから。

松村 そこは、ちょっと難しいですね。学校とは違う人間関係とか関係性を求めてくる子どもたちにとっては、学校、先生が入ってくるなんて、多分、論外だと思うんですけど。学校で、いじめっ子とか、その中での関係性とかが、プレーパークっていう場がその延長上みたいになっちゃうと、本来の機能ではない気がするの。

竹村 本来の機能とかっていうこともないような気がしてね。要するに、子ども食堂だって、子どもにご飯を食べさせ、

取りあえず、飢えないようにするってことは大事だけど、それだけじゃなくて、子どもがそこで話して大丈夫な大人っていうのと出会えるっていうことが、大事なかなっていうふうには思うのですね。

松村 でも、そういう頼られる大人が、プレーパークの場合は、プレーワーカーとか、竹村さんみたいな。

竹村 ごく普通のお母さんたちでも、話せる相手は向こうが選ぶので。

松村 その中に、なおかつ、地域のおじいちゃんだとかが、ちょっと入ってくるわけですよね。あんまり、お話聞いたりはしないかもしれないけど、物を作ったりとか、貢献というか、してくれるわけですよね。

竹村 こっちも別に、そういうところに何かを期待してあれするわけじゃないけど、できる人はものすごく上手だしね。中には元大工さんだった人が、カブトムシかなんかを竹や木の、木っ端で作って、「これ売っていいかな」って言われて、うーんって悩んだけど。人の少ないときには、戦争体験を聞かせてもらったこともあります。フィリピンでの体験とか、広島での被爆死者の遺体焼却作業とか。

松村 でも、子どもだけじゃなくて、いろんな人たちが社会とつながり、自分の強みとかを発揮できる場って、すごくいいですね。しかし、そういう場ってあんまりないですね。

竹村 私もそういうの、いいなと思ってね。別にそれは、そうしようと思ってしたわけじゃなくてね。

松村 リタイアされた方とかが、自分の強みとかを気軽に発揮できる場所って、プレーパーク以外で、子ども食堂ぐらしか、今のところないかもしれないですね。

竹村 そうかもしれないですね。分からないけど。目的別に行政やなんかがやる場合は、対象を限定することが多くなるから。

松村 分かりました。次の質問ですが、このインタビューの一つの大きな目的なのですけれども、行政への要望、不満、期待、その他もろもろ。もしありましたら、お願いします。

竹村 場所については、すごくいろいろ配慮していただき、いいんですけども。一番困ってるのが、プレーワーカーの人件費なんです。これは本当だったら、1カ所のプレーパークに2人はいないと本当は回っていかないのを、今はボランティアのお母さんたちや常連の青年たちが、何とかフォローしてるんだけど、その生活がわれわれの頃よりちょっと厳しくなってるかなという気がしてね。プレーワーカーのほうも、ボランティアのお母さんたちのほうもね。そういう意味では、いろんな子どもたちの要望に応えるためには、2人ぐらいのワーカーを安定して雇用したいのだけど、はっき

り言って、もう1人分の給料にも足りないの。

松村 ここにも書いてました。冗談っぽく、男性プレーワーカーが寿退社をせざるを得ないっていう。そういう待遇というか、そういう現実もあるわけですね。名古屋市からは、年間6万しか補助がない。

竹村 これ年間ですからね、間違えないでくださいね。

松村 年間ですか。

竹村 これは確か、要するに、緑政のほうから出てる分だと思います。道具代だとか。緑政土木って、要するに公園の管理者のほうですね。そちらのほうは割と最初から協力的だったんだけど、子ども青少年局のほうか。その辺が私たちの根回しも悪かったんでしょけれども。

松村 でも、今、お話聞いてると、本当に単に子どもと遊ぶだけじゃなくて、虐待とかネグレクトとか、そういう子どもたちの受け皿になってるっていうのは、すごく行政課題じゃないですか、これはもはや。

竹村 そうなんです。

松村 なんだけれども、そこに対する補填がないってことですね、今。

竹村 そういうことなんです。だから、費用対効果から言えば、決して悪い話ではないと思うんですけどね。

松村 ここら辺の機能があることを、私自身も初めて知りました。

竹村 それは大変、残念です。私たちがあんまり効果的に広報してない。

松村 いえ。だから、こういうところを、このインタビューもそうですけど、そういうのをもっと発信する機会があってもいいかもしれないです。もう発信されてるとは思いますけれども。

竹村 してないわけではないけれども、やっぱり難しいところがあってね。多分、行政のプレゼンみたいなきにはしてると思うんですけども、必ず。普通のお母さんに対しては、なかなか難しい。熱心に来てくれるお母さんの中にも、要するに、不登校の子の「晴れた日は学校を休んで」を始めるっていうときに、プレーパークはそういう子のための所だっていうふうを受け止められると困るっていう意見の人も。

松村 子ども食堂を利用する子どもは、貧乏と見られるのと同じような、そういうスティグマですよ。

竹村 そんな感じですね。そういうところで難しいんですよ。

松村 でも、少なくとも行政に対しては、こういう大きな機能を果たしてるっ

てことを、もっと行政に伝えて、しかるべき補填というか、助成金とかをいただく必要があるのでは。こういう場が、もしもなくなってしまったら、この子どもたちって、本当にどうなってしまうとかっていうのがありますよね。

竹村 っていうほど、そんなにみんなを救ってるかっていうと、なかなか難しいところなんですけどね。他のことはともかくとして、一番困ってるのは人件費なんです。大して収入なくても働いてもいいよっていう人が減ってきている、特に若い人でね。まだ1970年代生まれぐらいまでは結構、そういう若い子が多かったような気がするけど。多分、今は厳しいかなと思うけど、いないわけじゃないんですけどね。ただ、自分の子どもを育てるようにはいかないという悩み等、いろいろなんですけどね。

松村 リタイアした人たちは、時間あると思うんですけど、そういう人たちは、プレーワーカーじゃないですもんね。

竹村 全員が違うわけでもないんですけどね。この間、瑞穂の生涯学習センターでずっといろいろやってきた大工さんのおじいさんが、小屋づくりのワークショップがあるっていうときに来てくれたらしいんですけども。その人なんかは本当に子どもの言うことをちゃんと聞いて、上手に受け止めてたって言ってたからね。ただ、逆に、それこそ年金だけじゃ足りないから、もうちょっと収入が欲しいっていう人の場合は、必ずしも、そういうゆとりがないときが多くて。

時々、あつというようなことがあってね。

松村 確かに、そうですね。

竹村 それと、教えた人も多いしね、年配の人だと。プレーリーダー募集でやってきたときに、そういう人もいたし。悪意はないんですけどね。本人はすごく善意なんだけれども。子どもたちに伝えていきたい文化を持っているので。

松村 ちょっと合わないっていうかね。

竹村 ちょっと違うかなっていう感じがあってね。子どもから子どもに、文化が伝わっていく場になるといいと思うし、少しずつ、そうになっていってるとは思うので。

松村 指導が加わったとき、子どもが来なくなるようなことが、起こらなければいいですね。

竹村 その辺がね。もしかしたら、大丈夫な人がいるかもしれないけどっていう感じ。かなり経験のある、民間の児童館でずっと長くやってたっていう人も来てね。そのときは逆に、若くてちょっと楽しみな人がいたもんだから、お断りしちゃったんだけどね。ていうのは、どう考えてみても1人以上は雇えないんでね。本当は2人、採れるんだったら採ってもいいぐらいだなと思ったんだけど。そうすると、やっぱり若い人のほうがいいかなっていう感じでね。子どもに近いっていう意味でね。本当はそういう経験

のある人も一緒にやってくると、それこそ、いろんな問題を抱えた子やなんかの対応も。そのときはまだ割と大人のスタッフばかりだったときだったんで、どちらかといえば若い人を、自分たちに足りない若さを求めちゃったんですけどね。そこは難しいところなんですけどね。

松村 分かりました。じゃあ、一応、予定していた最後の質問に入っていきますけど。少し抽象的で恐縮なんですけど、これから日本社会、また人口減ったりだとかして、どんどん厳しいこともいわれてますけども、子どもや子育て支援とかに取り組んでいらっしゃる方々への期待とか、メッセージ的なものをいただけるとありがたいですが。

竹村 いろんな人が、いろんな所で、いい活動をされているので、ぜひエールを送りたいとは思いますが、こちらも本当に自分のところで、あっぷあっぷしているんで。

松村 社会からのエールがまだ足りない。

竹村 そうですね。ただ、困っている人のそばに、話を聞いてくれる大人がいっぱいいてほしい。

松村 行政からのお金が十分でないってことは、わかりました。他にも、子育ての社会化とかっていわれてて、社会全体で支えようってことが、スローガンとしては言われてます。でも、プレーパーク

とかの実態とかをお伺いすると、それほど温かくない印象を受けますが。

竹村 そういうことではないんだけど、どちらかという子どもを預かってほしいということのほうが、子育て支援でも出てきて、強いので、そこがちょっと残念かなっていう気はしますけどね。もちろん、仕事をするから預かってほしい人がいるのは分かるんで。ただ、それはもうちょっと、最初の頃の学童保育とかそういうものは、親も一緒に育てていこうっていうか。実はお金もなくて大変だったからなのかもしれないんだけど。何もなくてそこから始めてたせいもあるかもしれないけれども。そういう感じじゃなくて、子どもをしっかりと管理してほしいっていうか、それこそ監視カメラを付けてほしいというような声も出たりするっていう話を聞くとね。

あるいは、いつからでも、臨時の預かりでも何でも一緒にしますっていうと、家族みたいに暮らしているはずの所に不定期にいろんな子が交じってくるっていうのが、それはそれで保育方針とかそういうので大変なんじゃないかなと思ったりすることはあるんですよ。だから、子どもにとって一番いい形は何なのかなって思うんですよ。子どもは荷物ではないので、預けて事故さえなければいいというふうだと、それは違うし。一生懸命、保育してる人たちにとっても、なかなかつらいところがあるかなっていう気がして。それは一概には言えないので。でも、もうちょっと子ども中心の視点で。それは、それこそ行政に言うべきことなのかもしれないけれども。

松村 さっき、親も一緒に育てていこうっていうのは、親を育てるのではなくて、スタッフと親と子どもがみんなと一緒に楽しんでいこうっていう趣旨ですよ。

竹村 そうですね。私も一緒に子育てする中で、育てられたという実感がありますので。子どもの成長を実感できて、楽しい、心地よいという場じゃないと来続けられませんから。

松村 その点で言うと、今、確かに、共働き世帯、子どもの1歳を待たずに復帰する人が増えている中で、親と子どもと一緒に遊び、共通の経験とかをするっていう機会は、時代の趨勢かもしれませんが、減ってるのは事実であって。そのことに対する懸念じゃないけど、思うところはありますか。

竹村 働きたいっていうことは当然なんだけど、逆に今それほど安心して、働きながら子育てできるっていう安心感がないから、子どもは生まれたいのかなという気はするんですけどね。だから、どちらを取るかっていう話になってしまったら、みんな悩むよなと思ってね。

松村 確かに、そうですね。そこは非常に難しいですね。お母さんが本当に働きたい、自分のキャリアとかでしたいことがあるので、どうしても預けて。すぐ早期復帰だったらいいけど、例えば、旦那さんの収入も減っている中で、もしくは、ひとり親とかシングルマザーで。

竹村 働かざるを得ない人は、いっぱいいるんでね。

松村 そういう人たちが、本当は子どもと一緒に時間を過ごしたいけど、働かざるを得ないので、もう1歳待たずに、すぐ預けてみたいと感じだと、親にとっても子どもにとっても不幸な感じがしますね。

竹村 その辺は、私のような年寄りがいろいろ言うと、あれかなという気もして。大体うちは子どもが2人とも結婚もしないで、貧乏生活してるからあんまり言えないんだけど。その辺は、本当は、みんなはどう考えてるのかなっていうのは関心がありますけどね。

松村 プレーパークは、私の勝手なイメージだと、専業主婦の方の子どもが活用しているイメージなんですけど、そういうイメージで合ってますかね。

竹村 乳幼児で来るのは、それは専業主婦、または、育休中じゃないと来られないんですよ、森のひろばなんかの場合は。そういう人たちが結局スタッフとして残ってくれることは確かなんだけど、来る子どもたちは、逆にうちの場合は、小学生とか5、6歳ぐらいが多いかな。3~4歳でも、近くて1人で遊びに来る子もいるけど、そういう子は、こちらでも注意して見えています。子どもが1人で来られる子に関しては、別に親と一緒にできなきゃいけないということはないし、基本的にはお金も取らない。平日の午後、

特に、家庭訪問や面談の週は、子どもだけで来ることが圧倒的です。日頃は、子どもたちは「おけいこ」や塾で忙しすぎるのです。テスト週間なんて、常連の子どもたちばかりです。だから、行事みたいな、イベントみたいなときは一応、みんな、子ども幾らで取ってるものを、その子だけ取らないっていうのも難しいかなっていうのがあってね。鍋洗ってとかいう話のときもあるんだけど。

松村 働いて、みたいなの。

竹村 それがいいのかどうかはちょっと分かんないけど。ただ、私が「あんたはタダでいいよ」と言える筋でもないからね。皆の参加費で食べ物を持ち寄って、つくって食べるイベントだとね。子どもは100円ぐらいだけど。いっそ子どもはタダにしようかという話も聞いたから、変わるかも。

松村 取りあえず、今は専業主婦とか全然関係なく、いろんな子どもたちが使ってるってことですもんね。

竹村 確かに、人手は専業主婦だった人に頼ってますね。でも、それでも、ずっと専業主婦の人っていうのもいなくてね。これが仕事と思ってくれるか、少しずつライフステージっていうのが変わるもんですからね。そして、社会も優秀な人材を必要としていますから。

松村 子育てしやすい社会にするために、多分、いろんな論点とか考え方があるとは思うんですけど、竹村さん自身の

プレーパークでの貴重な経験を踏まえると、今、どんなことを考えられますか。

竹村 難しいですね。

松村 すみません、抽象的な質問で。

竹村 本田由紀さんが、『家庭教育の隘路』の中で語っていたのは、国によっては、放課後とか、どこでも、ほとんどただで遊べるような所がいろいろあって。だから、何を習わせなきゃいけないとか、そういうことをあんまり考えないで。それは考え方次第なのかもしれないけど。でも、仕事していても、子どもたちがどこで何をして遊んでたにしても、心配のない状態っていうのが。あるいは、習い事も含めてね。そういう所があれば、子育ては随分、楽になるんだけど。プレーパークもその選択肢の一つとしてあればいいかと。

松村 それはいいですけど。産んだら終わり、1歳になったら終わりじゃなくて、育児と自分のキャリアを両立させていく中で、いろいろ心配事が今たくさん、あまりにあり過ぎるかもしれないですもんね。

竹村 でも、思ったほど心配することはないような気はするんだけどね。ただ、貧困やなんかの格差とか、いろんなことが、あるいは、逆に教育虐待みたいな、そういうことが子どもたちに圧力になってるような気はするんでね。むしろ、そういうことをなくせば、もっと気楽に子どもたちが育っていけるんじゃないの

か。ある程度大きくなったら、子ども、ある程度っていうか、赤ちゃんのときから、子どもは自分の力で育っていくところは大きいのでね。子どもの育つ力っていうのが信じられると、随分いいんだろうけども。いろんなことから守らなければとか、「よりよい人生」のために、親がいろいろ選んで、お金をかけなくてはいとか。それがあんまり過剰だと、逆に、親子の距離感がつかめなくなっちゃう親が結構多いかなっていう気もするので。

松村 過保護じゃないけども、子どもが本来持つてて自分で育っていく力みたいなのを、過剰に介入することで、ちょっと。

竹村 それで毒親と呼ばれるような結果になるのかなという気はするんですけどね。

松村 そうすると、子育てしやすい社会ってことで今お聞きしてますけど、単にいろんな制度とかが充実とか云々ってことも重要だけど。

竹村 それはそれでいいんですけど。大事なことから。特に、高等教育の無償化とか、若い人の労働条件とか、将来に不安を持たずにすむような社会ですね。

松村 子どもとお母さんとの、お父さんもそうですけど、親子との関係性だとか、距離だとか、近さとかっていうことも、今すごくいろんなものがある中で、つかみづらい感じですか。

竹村 じゃないかなという気がするんだけれどもね。親ももうちょっと、お母さんももうちょっと、自分のやりたいことをやって、生きたいように生きてらいたいと思うんだけど。どの選択肢が正解というのではないから、人生は長いんだし、20年単位で考えれば、3回ぐらいチャレンジできるのでは。

松村 日本のお母さん、本当に忙しくて、時間もないって中で。

竹村 頑張っちゃってね。

松村 そういう疲弊、疲弊って言っちゃ語弊ありますけど、そういうお母さん、あっぷあっぷしてる今の現役の子育てママとかを見てると、今の学生とかは結婚とか出産に躊躇するのも、気持ちは分からなくもない。

竹村 多分、今の若い女の人は大変悩んでるんじゃないかと思いますね。

松村 昔みたいに、結婚、出産みたいな、そういう一つのライフコースではなくて、あまりにも、もちろん望ましいことなだけども、複線化し過ぎていて、果たしてどれが何か分からないし。それぞれのコースで、コースっていうか、その生き方で気を付けなければならないことだとか、障害とかある中で。

竹村 違うでしょうね、いろいろ。でも、お母さんたちも、自分のやりたいことを選んで、後悔せず生きられるよう

に、社会が援助しなければ、子どもが生まれず、滅びますよね。

松村 難しいですね。ここまでとさせていただきます。本日は、貴重なお話を、ありがとうございました。



(了)